

中国とソ連の人間像

大 島 康 正

私は教育大学で倫理学を担当しており、倫理学といえば、何よりも人間の在り方の問題、人間そのものの問題だ、と考えております。そこで、今日は、一般論としての人間の問題ではなく、ここ二・三年の間、前後六回海外旅行をしてきた中で、実際に見聞してきた共産圏諸国において、人間の問題がどのようにとりあげられているか、ということについてまとめてみたいと思います。

私は共産主義者ではないし、むしろ共産主義に批判的な人間ですが、一九六三年七月に、横浜からソ連のオルジョニーキ号に乗って、ナホトカに渡り、その後イルクーツク、モスクワ、レニングラードなど、一五の共和国を一月ほどまわりました。それも自費で、かなり勝手の旅行をして来ました。その後、東欧の共産圏諸国を、アルバニアを除いて、まわり、昨年は、四月に郭沫若が、突如として、自分の今までの考え方は、全部まちがっていた。自分の著書はみな焼いてくれてもかまわない、と声明したので、急に中国を旅行したくなって、北京の旅行社に自費旅行を申しこんで、「七都市をまわってきました。」たまたま、「文化大革命」の始まった時で、この状況にもふれたので、この状況を通じて、中国とソ連の人間像を考えてみたい、と思います。

まず一九五九年に、人民解放軍国防部長彭德懷が罷免され、ついで参謀総長羅瑞卿が失脚し、林彪が国防部長になりました。これが文化大革命の皮切りとして起ったわけですが、この時の争いは、彭德懷、羅瑞卿らのいわゆる唯武器派と呼ばれる人々が、軍の内部から斥けられ、林彪らの人民戦争派が、いれかわった、ということなのです。

唯武器派というのは、アメリカに勝つためには、何よりも中国の軍隊を近代的な武器で装備させることが必要だ、と考える人々であり、人民戦争派というのは、人的要素が才一で、精神がしっかりしていなければ駄目だ、と考える人々なのです。このように、軍隊の中で、軍事専門家養成を主張する側から、ゲリラ精神を国民に植えつけようと主張する側に、権力が移るといふ経過があり、これが文化大革命のはしりであったわけです。

一九六五年一月、楊文元が、京劇作家の批判を新聞に書きました。つまり、軍隊に始まり、ついで京劇作家の批判が行なわれた、というわけがあります。

最初の槍玉にあげられたのは、呉ガンの『海瑞罷官』で、これが反党・反社会主義の、危険なものだ、とされたのです。『海瑞罷官』のあら筋は、次のようなものです。中国の封建時代にも、必ずしも悪い役人ばかりだったのではなく、たとえば、海瑞

という役人は、人民に非常に暖い心をもって対していた。当時の皇帝が、人民を搾取し、弾圧しようとしたので、海瑞は、皇帝に直言し、そのため皇帝の怒りにふれ、官をやめられた、ということです。

これがなぜいけないのかというと、中国のおよそ四千年の歴史の中で、真に人民を愛し、人民に奉仕した支配者はいないのであって、毛沢東こそ最初の人民に奉仕する人なんだ、というわけです。たとえば、海瑞だって人民に仕えたのではなく、皇帝に仕えたのであり、それだけでも、海瑞は人民の敵なので、それを讃えるのは、まちがっている。むしろ、封建時代には、人民を抑圧した方が、ましなのだろう。というのは、それだけ、人民の皇帝への憎しみがまし、それだけ、封建社会が早く崩壊するからだ。海瑞のような、変なヒーローニズムは、人民のためにはよくない、というわけです。

それと同時に、田漢の『謝瑶環』、孟超の『李慧娘』など、代表的な京劇作品が、反党・反社会主義的要素をもっているとして指弾されました。これが一昨年一月から、昨年三月頃までの状況でした。その後、私が、中国を旅行した昨年〇五月には、ひろく文学者が批判されていました。

私が申しあげたいのは、これらの批判に平行して、どういうことが行なわれていたかと、いうことです。

王杰、雷鋒、麦賢得、歐陽海など、解放軍の無名の兵士の日記が、共産党に推薦され、毛沢東思想に最もかなったもの、「毛思想好学生」として、讃えられていたのです。つまり、専門の作家は否定され、戦死した無名の兵士、すなわち、素人がすぐれた作品を書く、と絶賛されていたわけです。

また北京大学でも、学長の陸平、副学長のセン伯賛が、学生に吊しあげられ、その他、南京大学長の匡亜明、華東師範大学の歴史の主任教授・李平心が吊しあげられました。つまり大学の哲学、歴史学の専門研究者が、学生に批判されたわけです。

ちょうど私が上海に着いた時、京劇俳優周信芳が、批判され、間もなく自殺してしまいました。こうした批判は、やがて、映画界の代表者、医学界の代表者に対してむけられ、特に八月に紅衛兵が現われてからは、人民警察、宗教家、外人学校が否定され、さらに人間だけでなく、店でも、道路でも、固有名詞が排され、普通名詞に改めさせられたのです。

こうして、あらゆる場面で、専門主義の否定、技術主義の否定が、おこなわれ、この専門主義否定が、文化革命を一貫して流れているといえます。

それでは、なぜ毛沢東、林彪らが、専門主義というものを否定しているのか、というと、毛沢東の理想としている共産主義的人間像というものは、専門主義の上では、成り立たないからである、といえます。

中国では、三つの闘争ということがいわれています。つまり、精神と肉体の対立を克服すること、都市と農村の対立を克服すること、そして工場労働と農業労働の対立を克服することの三つが、盛んに主張されてきました。そして「大慶に学び大牙に学べ」というスロー

ガンが方々に出ています。太サイというのは、人民公社らしく、農場だから大したことはないのですが、問題は大慶なのです。これは、もとの満州にあるといわれていますが、どこにあるのかわかりません。どういう所かというところ、年間三百万リットルの原油が出る大油田だといわれています。何を大慶に学ぶのかといえば、大慶地方では、農業労働と工場労働が大変うまくいっていて、男たちは、工場で機械労働をやり、女達は大農場で働く、農繁期には、事務員を兼ねて、半分以上の工員が、農場に行き、農閑期になると、女たちは、工場の手伝ったり、保育所、郵便局の建設を手伝ったりする、という風にして工場労働と農業労働が、一体になっている、これが「大慶に学べ」ということの意義なのです。

今度の文化革命で、盛んにいわれることは、「工にして農、文にして武」、という言葉があります。つまり一人の人間が、工場労働者でもあり、農民でもあり、また文化的な社会人であるとともに、立派な軍人でもある、ということなのです。

これが、毛沢東たちの考えている共産主義的人間像なのです。四者一体の人間になれ、というわけです。

たとえば、武漢大学では、男の学生も女の学生もみな武装して、銃をもち、「伏せ！」といわれれば、大地に叩きつけるように伏せるし、「突撃！」といわれれば、勇しい喚声をあげて、突撃する、という場面をみせつけられたのでした。また、中学校以上には、付属工場がつくられていて、生徒たちは、「半労半学」といって、あるグループは午前中勉強し、午後工場労働し、あるグループは午前中働いて、午後勉強する、ということが徹底して行なわれています。孔子の廟のある曲阜の近くの中学校では、大きな農場があって、「半耕半読」、つまり一日のうち、半分は農場で働かせ、あとの半分は教室で勉強するという具合でした。さらに武漢はじめ各地のコンビナートでは、労働者たちは、八時間労働が終ると、七ないし八人で毛沢東思想の学習をやる。その学習が終ると、あと一時間ほど民兵訓練をやる、という風でした。ですから、文にして武、つまり労働者でありながら、同時に軍人でもあるということは、学校でも工場でも、おこなわれているわけです。

こうして、「工にして農、文にして武」、といわれる四位一体の人間こそが、毛沢東の共産主義的人間像である、と思われるのです。

それではソ連ではどうなっているか、ということになりますが、話を四年前ナホトカからソ連に入ったところからはじめましょう。その頃、ナホトカからのシベリア鉄道の駅毎に、「アメリカに追いつき、追いつき」というスローガンがはられていました。アメリカに追いつき、追いつきためには、当然、大量の科学技術者や大学教授、すなわち専門家が必要であり、これらの人々を養成しなければなりません。これがどういう現象となって現われているか、といいますと、賃金にはつきりできています。

一九六三年、ソ連労働者の平均賃金を方々でききましたが、百ルーブルだ、と党员は答えます。百ルーブルは日本円で約四万円ですが実際の流通価格では、約一万円しかありません。それも、党员でない工場の責任者などにきくと、八〇ルーブルというのです。またモスク

ワのバーマン工業大学と、レニングラードのカリーニン工業大学で、卒業生の初任給をたずねます。二百ルーブルだということです。つまり、三五ないし六才の労働者の平均賃金が、わずか百ルーブルなのに、大学出の技術者の初任給が、その倍以上というわけです。それほどに技術者を大事にしているということになります。技術者の給料は、大学教授よりもはるかによいのです。

この点が、中国には不満であり、また「ソ連は修正主義である」、といわせるような現象が、事実、ここから出てくるのです。

現在のソ連では、共産党員になることは、大変むずかしいことで、全人口の七割といわれている党員になるためには、非常にまじめな生活をし、一生懸命人民に奉仕し、やっと党員候補に選ばれ、その後、約一年間の勤務評定にパスして、ようやく党員になれるのです。

もちろん、共産党員といっても階級があって、モスクワの高級党員、たとえば、ブラウダの編集長などは、大変ぜいたくな生活をしています。民衆と直接接する党員は、民衆の模範にならないので、技術者などに比べると、はるかに安い月給で暮しているのです。

そうすると、どういう現象が出てくるか、というと、大学を出て、腕に自信のある人間は、何も無理をし、苦勞をして共産党員になる必要はない、党員になって、安月給をもらい、禁欲的生活をするより、自分の技術をもって、社会に迎えられる、楽しいぜいたくな生活をした方がよい、という考え方がひろまっています。これが、フルシチョフ時代に出てきた自由化という空気の一要素であります。以上のことにつきまして、私が旅行中体験しましたことから、一つ二つ例をあげてお話ししてみたいと思います。

レニングラードに「ネフスキー大通り」というのがあり、その右側に「カテリーナ公園」と呼ばれている公園があります。私が、そこをぶらぶら歩いておりますと、ベンチにすわっていた大学生から呼びとめられました。そこでベンチに腰をかけましたら、その大学生が「英語で話しましょう」、というのです。その意味は後でわかったのですが、話をしていくうちに、彼が「あれをどう思う」、と公園の入口の上の方を指さすのです。私がソ連にまいりましたのは、一九六三年の七月、例のアベック衛星が飛んだ直後だったわけですが、公園の入口に、ペリコフスキー中佐とテレシコワ女史二人の大きな写真がかかけられていたのです。このような光景は、ハバロフスクでもイルクーツクでも目にいたしました。そこで私は、大学生がなにか御世辞でも期待しているのかと思ひまして、「ソ連もなかなかやるではないか。スプートニクにおいては、ソ連の方がアメリカよりも一歩先んじている、と感心する人が日本でも多い」、と申しますと、その大学生は、私のまったく予想外の返事をするのです。「とんでもない。あれは、共産党が、おれ達の生活を犠牲にして、莫大な金をつぎこんで宣伝のためにやっているのだ。おかげで、おれ達の生活は依然としてまずしいのだ。日本に帰ったらあんなものに感心するなんていつてくれ」、というのです。そこで私もびっくりしまして、「君は共産党がきらいなのか」、とたずねますと、「そうだ。あんなものは宣伝ばかりして大きらいだ」、というのです。「共産党員がきらいなのは、君たちの大学のなかで君たちばかりか」、「そうじゃない。われわれ学生の2-3は共産党がきらいだ。ごく一部のやつだけが、コムソモール（共産主義青年団。日本の大学の自治会のようなもの）

でガチャガチャやっているんだ」、「だって共産党の一党独裁の現状じゃしようがないじゃないか」、「だからおれたちの声をきいてくれる別の政党がほしいんだ」、まあ以上のような問答をくり返したわけなんです。話をよく聞いてみますと、彼らの希望する政党は、日本ではいえば民社党にあたるようなものらしいのです。

ソ連では、巡査がしょっちゅうパトロールしておりまして、外人とあまり接触させないようにしておりますが、私と例の学生が話をしております時にも、パトロールの巡査がかなりそばにやってきました。「お巡りさんが向うからやってくるが、こんな話をしていてもよいのか」、と申しますと、「なかに、ポリ公なんか英語がわからないから大丈夫だ」、というのです。そこで、はじめて、彼が「英語で話そう」、といった意味がわかったわけです。

これと同じような体験は、モスクワでもいたしました。当時は、まだフルシチョフが飛ぶ鳥も落す勢いだった頃でしたが、ある学生をつかまえて、「フルシチョフをどう思う」、とたずねますと、「あいつは大ホラ吹きだ。あいつはデカイことをいうが、おれたちのためにやってくれることは、ほんのチョッピリだ」、といておりました。つまり、フルシチョフの時代以来、外国人旅行者に対しても、公然と自国の政治を批判するような自由化の空気が、ソ連社会に出てきたといつてさしつかえないと思います。

たとえば、私が訪ソしました一九六三年には、エフトシenkoという若い詩人の「スターリンの相続人」が発表され、ソ連の若者たちの間で大流行した年なんです。この話は「わが国の共産党員は実にだらしない。スターリンの全盛時代には、スターリンにべこべこし、スターリンが失脚すれば、こんどは彼を批判して、自分たちの地位の安たいをはかろうとする。こういう手あいわが国の共産党員なのだ」、というような意味のことをいっております。ついでに申しますと、ロシア人は詩を非常に愛好します。さらに、ロシア人の詩に対する考え方は、われわれの場合とちがっています。詩は活字で印刷されたものを目で味わうのではなく、声を出して暗誦するものだ、と考えております。ですから、プーシキンでもそうですが、誰かが詩をつくりますと、公園の森の中などで、人が集ると台の上にあがって、自作の詩を朗読するわけなんです。それをみんなが聞いて暗誦しまして、段々に拡まって行くのです。ですから、ソ連では、詩は検閲をまぬがれることが出来るのです。

ともかく、ソ連が今日向っている方向は、「アメリカに追いつき、追いこせ」が基本線としてある、と申せましょう。そのためには、専門家・技術者を大量に養成しなければならない。そうしますと、おのずから専門家・技術者は高給でむかえられ、共産党員よりもはるかに優遇されることになります。そうした人々が、少々共産党の批判をやりましても、共産党はこれをやっつけるわけにはいかない。そこへもってきて、一九六二年には、ハリコフ大学の経済学教授のリーベルマンが、「ソ連経済も、官僚統制をやめ、資本主義をまねして、各企業にそれぞれ独立採算をとらせ、利潤をあげるように企業間の競争をさせるべきだ」、という主張をしております。そうしまして、ブレジネフ、コスイギンは、就任早々この主張をとりいれております。私は、一九六三年にも東欧をまわりましたし、また昨年も、暮か

ら正月にかけまして東欧にまいりましたが、東欧諸国では、ソ連以上に、このリーベルマン方式がとられております。そういう意味で、ソ連で考えられている人間像と、中国の毛沢東・林彪が考えております共産主義の人間像とは、百八十度逆になっている、といえると思います。

このような両者の対照は、教育につきましてもいえます。中国の学校では、「半耕半読」とか、「半労半読」ということがさかんにいわれておりますが、ソ連ではそのようなことはない。フルシチョフは、一九五八年に、「わが国の教師はなっていない。教師は、教室で教科書中心の教育ばかりやっている。そのため、子供たちは、みんな、頭と手足が分離してしまい、観念だけが先走っている。親は親で、子供を上級学校に進学させることばかり考えている」という声明を出しまして、翌年、教育制度の大改革を行なっております。どう改革したかと申しますと、中学校中等学年を一年延長しまして、八年制の義務教育制度にしたわけです（それ以前は、四年間の中学校初等科、それぞれ三年制の中学校中等学年、高等学年の「十年制中学校」と呼ばれる制度になっておりました。これを終了しましてから、大変な入学難を突破して、五年制の大学に入っていたわけです）。中学校を一年間延長し、十一年制にしたと申しますと、教育レベルをあげるための一見思われますが、実は、教育レベルの低下をふせぐために、このような改革がなされたのです。そうしまして、五年の九月から、一週の間割を、教室にいる時間と工作・実験をやる時間が半々になるようにしたのでありますが、この試みは全然失敗してしまいました。その理由は、才一に、工作・実験を指導出来る教師がいまい。つまり、先生の給料が、労働者の平均賃金とほぼ同じ九十九ブルしかとっていない。そうまいりますと、なにも好んで教師になろうという人はいないわけです。そこへもってきまして、中学校中等学年の場合、付近の工場に実習に行く必要があるのですが、近所にそういった施設があればよいのですが、なければバスで送り迎えをしなければならぬ。近所に工場があります場合でも、いろいろな種類の工場があれば問題はいいのですが、たとえば紡績工場だけしかない場合には、労働が単調になってしまいうために、かえって子供の労働意欲をそぐことになってしまいます。さらに、一たん子供を工場に引き渡せば、それ以降教師は口をはさめない。工場の組合長は教育というものを知りませんから、普通の労働者と同じ労働を子供におしつけることになる。こういった事情がかさなりまして、この制度は、フルシチョフの失脚と共に御破算になり、もとの十年制にもどされてしまいました。したがって、ソ連では、依然として、教室・教科書中心の教育が行なわれているわけです。したがって、先ほど申しました中国の「半労半学」、「半耕半読」の教育方式とはまったく対照的であり、そこで求められる人間像にも、相違が出てくるわけなんです。

最後に申しあげたいのは、ソ連と中共とは、人間像はなるほど異なっておりますが、ただ、両者共、それぞれ別の形で「愛国者」をつくらうとしている点では、共通しているのではないかと、いうことなのです。ソ連の学校に行きますと、どの教室にもかならず、レーニンの肖像がかかげられております。イルクーツクの幼稚園に行きましたら、一人の男の子が代表しまして、「レーニンの国によく

らっしゃいました。歓迎の意味でレーニンの詩を朗読いたします」と、このことです。問題は、レーニンをどういふ人として子供に教えているか、ということになります。結局、ソ連建国の父、つまり愛国者としてレーニンを教えているわけです。さしずめ、戦前の日本なら、「日本近代化の父である偉大なる明治天皇」とでもいうのにあたりましょう。ソ連は今年で革命五十週年になりますが、いまだに「国家」という問題は一つも解決されていないといえます。マルクスは、国家はブルジョワの搾取手段であり、プロレタリアには国境はない。だからブルジョワが倒れた時には国家は死滅するんだ、といっておりますが、現実には、社会主義の国ほど、国家主義の強い国はないと申せます。

このことは中国についてもいえます。中国で大学生をつかまえて、「大学を卒業したら、就職は誰がきめるのか」、とたずねますと、みんな一様に、「国家がきめます」と答えるのです。そこで私が、「個人の希望はいれられるのか」、とききますと、「どういう意味なのか」、と逆に反問してきます。そして、「われわれは、一体何のために生きているのです。誰でも国家と人民のために生きているのではないですか。だから、国家が命令すれば、どんな田舎へでも行き、そこを才二の故郷として一生懸命に働きます」と、いうわけです。

また、中国では、毎年二千万の人口が増加し、政府も頭をいためておりますが、その対策として、女は二五才、男は三〇才迄結婚しないのが、一種の法律になっております。子供も二人までがいいのですが、三人目を生みますと、職場で、みんなから、「お前、そんなに国家に迷惑をかけていいのか」、といわれるそうです。

以上お話いたしましたように、愛国者を作ろうとしている方向では、ソ連も中共も共通しておりますが、どういう形の愛国者を作るかは、両者はまったく逆の方向をたどっている、と申せます。長時間御静聴を感謝いたします。（東京教育大学教授）
（これは、四月二十九日に開催された当学会才二回大会に行なわれた公開講演の要旨である。）